６．さまざまなエッセイ

ワルシャワ旧市街にて筆者

ポーランド自転車一人旅

～国境を越えて～

鳴神　雅史

３．自転車での陸路国境越え(連載第１回より)

国境の街、オーデルに着いた。巨大な教会から大きな鐘の音が響くとても小さな街だ。一刻も早く自転車での国境越えを体験してみたくて、すぐに国境の川へ向かった。河川敷が遊歩道になっており、200m ほど先のポーランド領が手に取るように見える。「おお！川の向こうは外国だ！」(こういった素朴だけど強い印象が読んでて、自分もそこにいる気がして一番面白い。)と日本に居ると体験できない風景を暫し味わってから、国境検問所を兼ねる橋へ向かった。

自転車は徒歩の人と同じく、歩道の検問所を通れる。車道の検問所は渋滞だが、こちらはスイスイ行ける。ドイツ側の係官にスタンプを押してもらうと、同じ部屋の仕切りの東側にポーランドの係官が座っていた。ポーランドで出会う初めてのポーランド人に「ジェンドブルィ(こんにちは)」と挨拶したのが僕の初めてのポーランド体験となった。橋を渡り終えるとスゥオヴィッツという小さな町で、道の真ん中にポーランド国旗がはためき、看板はポーランド語で、道行く車はポーランドのナンバーをつけていて等々、といろいろなモノたちからさっき居た所と国が変わったのが理解できた。

その国境の橋のたもとでホテルを探して地図を見ていたらアルコール臭のぷんぷんするオヤジが近寄ってきて、ポーランド語で何か話し掛けてきた。彼は僕が出会ったポーランドの民間人第一号だ。何やら小銭をくれ、と言っているようなので、ロシア語で「ポーランド語は分からない」と言ったら彼は「パニマーユ(ロシア語で:わかった)カネだけ置いていってくれよ」としつこいのでその場を離れた。ロシアでもよく酔っ払いに小銭をねだられたことがあったが、国境を越えてポーランドに入った途端にロシアっぽい人に出会ったので、「さすが！スラヴ人の国だから酔っ払いの多さでもロシアに近くなるのだ！」と勝手に思い込んだ。さらに第一号の遭遇でロシア語が通じたので、やはりポーランドではロシア語が通じるのだ、とも思い込んでしまった。〈…〉その後向かったワルシャワでは、ここポーランドではやはりロシア語は使わないほうがいいのだということを身にしみて知ることになった。

ポーランド最初の街ジェピンで出会った義足のおじさんと

おさらい(連載第３回・最終回より)

自転車で外国を走ってみたい、国境を越えてみたい、という願いを叶えるために春休みを使ってドイツ・ポーランド国境へやってきた。ベルリンから東へ行くこと約 80 キロ、フランクフルト・オーデルとポーランド領スォヴィッツとの間に架かる国境の橋を超えて、ポーランドの大地を走り始めた。

次にリトアニアのヴィリニュスへ行くためにワルシャワからリトアニア国境のシェストカイという小さな村の駅で特急を待っていた。次の 16 時発の特急が出るまで 2 時間以上もあるので、駅の周りを自転車で走ってみて駅に戻ると、「ヴィリニユス」と表示のある列車がホームから走り出そうとしている。僕の時計はまだ 15 時なのに、駅の大時計を見ると 16 時。ポーランドとリトアニアに時差があるのを知らなかった！この列車を逃すと無人の荒野で野宿することになる。運転手に手を振って止まってもらおうとしたが、首を横に振って無視された。列車は歩く程の速度で走りだしている。ホームの上もおかまいなしにチャリをこいで、客車の開いているドアの所に立っていた女性の車掌さんたちに「乗せて！」と言ったら非常ブレーキをかけて止めてくれた。「早く乗って！」とせかされながら低いホームから何とか自転車を引き上げて乗り込んだ。生まれて初めて走り出した列車を止めてしまった！

６．ヴィリニュス

何とか列車に乗り込んだものの、車掌のオバちゃんに「自転車は袋に入れないと邪魔だよ」などとつっけんどんな対応をされるあたりが、ポーランドから、かつてのロシア文化圏の国に入ったのだなぁと思った。「命のビザ」で有名なカウナスにも寄ってみたかったが、リトアニアではヴィリニュスにたった一泊だけした。ヴィリニュス駅前は一国の首都とは思えないくらい小ぢんまりとした雰囲気であった。小さい街だが坂が多くて、切り替えギアのない小さ

な自転車では少し上り坂がきつかった。

『地球の歩き方』に載っている安いユースホステルをやっとのことで探しあてて泊まることにした。ヨーロッパに来て思ったことだが、なぜこちらではユースホステルの部屋は男女相部屋なのだろう？女性客も気にする人がいると思うし、僕が自分で男でも、やっぱり隣のベッドに知らない女の子が寝ていると、やっぱり緊張してしまう。

そんなユースで、同室のイタリア人のお兄ちゃんと、東京外国語大学の女の子と知り合った。イタリア君とは英語で話したが、やはりどちらかというと話し慣れたロシア語のほうが話し易いこともあり、会話がぎこちなかった。日本人の彼女はポルトガル語学科だが、卒業旅行なので今回はバルト三国と北欧めぐりだという。かなり久しぶりに日本語を話せて楽ちんだったのと、うれしくなったせいもあり、この日はヴィリニュス市内を一緒に観光することにした。さらに彼女と一緒だったお陰で、一人だと貧乏性なので絶対に入らない郷土料理のレストランにも行くことができた。よかったなぁ！

さて、次の日はヴィリニュスでも自転車は大活躍した。車道の路面は普通だが、歩道は舗装のコンクリートブロックが壊れてかなり走りづらい。しかも歩道に平気で駐車していてその駐車マナーもかなり悪くて、ドイツとはだいぶ違うなと思った。当初の想像どおり、東へ行くに従って道路の舗装の質、運転マナーなどが悪くなっていくことが実感できた。特に、車道と歩道の境目になる縁石が、タイヤが乗り上げられるように低くなっていないので、歩道に上ろうとする毎に自転車を止めて持ち上げなくてはならないのが不便だった。この縁石の不便さはモスクワと同じだなと思った。

7．再びワルシャワ～クラクフ
…自転車とのお別れ

旅の目的のひとつであったアウシュビッツ収容所を見学するために、ヴィリニュスからワルシャワへ戻り、そのまま同じ日にクラクフ行きの列車に乗った。

クラクフ駅に夜着くと、ここでもワルシャワの時と同じようにプライベートルーム（民宿）の客引きの人々が大勢いた。年配の婦人が英語で泊まっていかないかと案内してくれた。「ほかにユースホステルがあるから」とそっちの値段を言うと、同じ 30 ズオチでいいよと言ってくれるので、こちらの民宿に泊まることにした。年齢や背格好が日本で働くぼくの母を思い出させ、この人も生活のために宿泊客を見つけるのにがんばっているんだなと思うと、こっちに泊まってあげようと思った。

クラクフ駅前から町の広場を抜け、その周りを環状に走る道路を渡ったあたりに彼女のアパートがあった。家族は彼女の年老いた両親とで三人暮らしらしい。おばあちゃんに「バルゾミ・ミウォ（はじめまして）」と片言のポーランド語を話したら、おじいちゃんに「スウハィ（ねえちょっと聞いてよ）。※#$&″…（ポーランド語を喋ったよ！）」と喜んで話しているのが聞こえた。やはりポーランド語とロシア語は似ているので、少しだけなら分かるようになってきたような気がする。ぼくには使っていない十畳くらいの部屋を貸してくれた。バストイレと台所は家族と共用で、その他にこの三人の居間があった。おじいさんとおばあさんは日中は家にいるようだけど、娘さんは昼間はどこかのオフィスへ働きに出ているようだった。

この五階建てくらいの古風なアパートは、おそらく築百年以上は経っていそうだった。貸してもらった家の鍵は、昔話に出てくるような、鍵穴から部屋の中を覗けるようなクラシックなタイプだったので感動した。しかしポーランドではあまり自転車が普及していないせいか、外に駐輪場はないので、自転車を担いで二階の部屋の中に入れておいた。

近くの 24 時間スーパーを教えて貰ったので、早速食料を買いに行って夕食を作った。ポーランドでは食料を買うたびに、物価が安いことに感謝した。この日は冷凍食品のビゴスと黒パン、それに普段は一人でなら飲まないビールを買ってみた。この前泊まったワルシャワのマレクさん家もそうだったが、ポーランドの台所のガスコンロはどこも自動着火でなくて、いちいちマッチで火をつけなくてはならないので、火傷しないようにコツがいる。暖めたビゴスは冷凍食品とは思えないくらい美味かった！

次の日は、クラクフから 70 キロくらい西にあるオシフィエンチム市に日帰りで行ってきた。あの有名なアウシュビッツ収容所を見学するためである。民宿のママさんが、列車で行くよりも乗り合いバス（十人乗りくらいの小さなバン）で行ったほうが安いよと教えてくれたので、この日は自転車を置いていくことにした。なるべく多くの街を自転車で走ってみたかったが、狭いバスなので仕方がない。それでもたった 7 ズオチ（約 210 円）でオシフィエンチム駅前まで行けた。ちょうど運転手さんがアウシュビッツ入口で下ろしてくれたので、迷わずに行くことができ

アウシュビッツ収容所にて筆者

た。入口にはヨーロッパ各国のナンバーを付けた観光パスが止まっていた。驚いたことに、日本人の団体観光客もいた。日本からの直行便のないポーランドなのに、意外と多いのかもしれない。

オシフィエンチム市はものすごく小さな町で、駅前にも殆ど店らしきものは無いくらいの淋しい町だった。この日はオシフィエンチム収容所と、そこから 2 キロくらい離れたビルケナウ収容所を見て来たが、小さな町だからか連絡バスの便も少ないので歩いて移動した。僕が行った日はちょうどイスラエルの高校生くらいの子たちが見学に来ていた。国旗を持つ子、ダビデの星のマークのついた T シャツを着ている子、など民族色にあふれる様相を呈していた。オシフィエンチム収容所とビルケナウ収容所ともにイスラエルの高校生たちが来ていた。修学旅行でここに来ているのかもしれない。印象的だったのが、女子生徒たちがある部屋に入った瞬間泣き出して顔をそむけてしまったことだった。そこの部屋には収容者たちの（長いのでほとんどが女性のだと思うのだが）切られた髪の毛の山が展示されていた。ちょうどこの旅行に出る前にイタリア映画「ライフ・イズ・ビューティフル」を観て収容所にも行ってみたくなったので、映画に出てきた光景とだぶって見えた。この目の前のガス室だった瓦礫は 60 年くらい前は死体工場だったのだ。最期の瞬間には何を思ったのだろうと思いをはせた。自分が今こうして平和な時代に健康な体で生まれて、好きな国を旅行できることをとても感謝した。

収容所を一日がかりで見学してクラクフの民宿に帰ってふと気付くと、この短い旅が後半にさしかかった。そろそろ自転車をどうするかを考えなくてはならない。日本から持ってきたこの自転車は、本やら土産物を買って増えた荷物と一緒に持って帰るのはやはり重たすぎる。当初の計画通りなら、どこかで誰かにプレゼントするはずである。でも帰りの飛行機に乗るドイツのフランクフルトまで連れていこうか、と考えた。次に寄るチエコのプラハや、最後のフランクフルトでも自転車がないととても不便だろうと予想できたからだ。しかし、誰にも貰ってもらえなくて、その辺に放っていくことだけはしたくない。そこで思い切って決めた。クラクフでは今回の旅で初めて同じ所で連泊することになっていた。例の民宿にはおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいるのだが幸い自転車を持っていない。そんなことを考えながら部屋で夕食を食べた。よし！明日は自転車をあげることにしよう。

クラクフでの夕食

次の日はクラクフ市内を一日自転車で探検して歩いた。クラクフの街を適当に走っていると、旧市街から抜け出ていつの間にか社会主義時代に建てられたアパート街へ出た。街の中心部の華やかな商店街とも違った、普通の人々が暮らす何の変哲もない町にあるスーパーで買い物をして、庶民の暮らしが垣間見えた気がした。自転車の利点は小回りのきくことである。市電やバスを待つこともなく、次々と分かれる交差点を思うままにスイスイと好きな方角へ行けることだ。スーパーで買い物をしていると、5 歳くらいの男の子とお父さんが一緒に買い物をしていた。おもちゃ売り場の前を通った時に男の子が勝手にミニカーをお父さんの買い物カゴに放り込んだのだが、お父さんが「今日は買わないんだよ」と元の棚に戻す光景がかわいらしいなぁと思って見ていたら、苦笑しているそのお父さんと目が合って、思わず二人で微笑んでしまった。言葉は通じないけれど、非言語的コミュニケーションを通して普通の生活をしている普通のポーランドの人と心が通じたような気がしてとても嬉しかった。短期の通りすがりの旅行者にしか過ぎないのに、観光地でない、ありふれた生活の息吹が感じられる地区へ来られたのも自転車があってこそである。自転車よ、ありがとう！お別れの前に、クラクフの旧市街の広場で休んだ時に、ありったけのチリ紙で自転車の挨を落としてやった。

その日の夜は、夜行列車でプラハへ行くことにした。民宿に荷物を取りに帰った時に、おばあちゃんしか居なかったけれど、「自転車をあげます」と言った。この際、意思を伝えるにはロシア語でも仕方ない。何故ここで自転車を置いていくことにしたのかを一生懸命ロシア語で説明した。「もともと盗まれても勿体無くないように、大学のゴミ置き場で拾った自転車を自分で修理して持ってきたこと。持って帰っても日本には自分の自転車があるからあまり使われなくなってまたゴミになってしまい自転車にもかわいそうなこと、等々」を話すと、おばあちゃんは「ドブジェ、ドブジェ」（よし、よし）と繰り返していた。どうやら大体のところ僕の話は伝わったようだ。こうして自転車とはお別れして、夜のクラクフを後にした。

8．プラハ～フランクフルト…終わりに

次に寄ったプラハでは、自転車が無いのはやはり疲れるのを実感した。短い付き合いではあったが、あの青い折り畳み自転車がやはりいとおしい。プラハでは今回の旅で初めて地下鉄を使った。たまに

は地下鉄もいいかなと納得したが。

プラハで一泊した後、夜行バスでフランクフルトに戻った。何故かとても懐かしい感じがした。この旅が始まった僅か10日ほど前に自転車で走り回ったはずなのだが、色々な所をまわって密度の濃い日々を過ごした後なので、とても長い時間が過ぎた気がした。

学生時代の長期休暇はこれで最後だろうと思うので、海外の自転車旅行も最初で最後になるだろう。〈…〉来年春には国家試験に通ったら、研修医生活が数年続くので海外はおろか国内サイクリングもできないだろう。〈…〉いつか未来に、研修生活が終わって生活が落ち着いたら、オジさんになったぼくは、大きくなったぼくの子供や女房と家族できっとどこかの国を走っているでしょう。短い旅を長い連載にしてしまいましたが、飽きずに読んでくださった読者の皆様、ありがとうございました。

私はヨアンナ・クンツェヴィチと申します。

ポーランドの第二の都市、クラクフの出身です。仕事の経験を増やし、魅力的な人に出会い、そして私にとって全く新しい文化を知るために今年の 3 月末に札幌にやって来ました。私は若い研究者で、そそっかしい性格で、人生のさまざまな分野で自分の居場所を探し求めている人間です。音楽は私の人生の中にいつもありました。音楽に対する愛を教えてくれたのは父で、彼は家ではよく歌ったりギターを弾いたりしていました。10 歳の時、私は自分でもギターを弾くことを覚えました。とはいえ、子供の時に音楽学校に通わなかったことを今でも後悔しています。

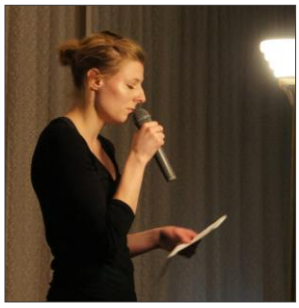
他の道に進み、自分の第2の情熱を育むために、体育学校で学び始めました。専門競技は走り高跳びで、現在でももっとも優秀な選手のひとりに数えられています。私のスポーツにまつわる冒険はおよそ 11 年間続きました（ポーランドの全国大会でジュニアとユースの部で2回準優勝しました）。

化学大学の4年生の時に、学問のためにトレーニングを諦めました。高校そして大学で学んでいる間も、音楽に対する情熱から離れたことはなく、いつも世界中の音楽に囲まれていました。音楽に触れ、音楽の才能を伸ばしたいという気持ちが強くなり、クラクフのヤギェウォ大学で博士課程を始まるとすぐに、クラクフのジャズスクールのジャズボーカルのクラスで学び始めました。そこでは素晴らしい人と卓越した音楽に出会いました。人との新たな触れ合いが友情へと発展し、ジャズトリオを結成することになり、クラクフのジャズクラブのコンサートに出演し始めました。ジャズスクールは4年間学んだ後に卒業しましたが、音楽への衝動があまりにも強かったため、カトヴィツェの音楽大学のジャズ学科の正規のコースに通うことになりました。

音楽大学の1年生の時に化学の分野で博士号を取りました。その時に、北海道大学の触媒化学研究センターの大谷教授の実験室でポストドクターのポジションを提案されました。私は新しく始めた学校での仕事と音楽の勉強を一時的に中断しこのチャンスを利用することを決心しました。日本でも自分のこの情熱を育むことができると期待したからです。

札幌での滞在の初めから自分の音楽への陶酔の証を、とりわけポーランド語の曲を機会があればいつでも見せようと披露しようと努めてきました。とりわけ北海道ポーランド文化協会が企画した「午後のポエジア」に出演しました。日本でのこの音楽の冒険は、自分の音楽の創作活動に対するインスピレーションとなるのではと、私は期待しています。

音楽は私にとっては単なる趣味ではありません。音楽は私の内面にずっと離れずに存在しています。それがコンサートであっても、家でも、通りでも、実験室でも、どこででも。それに逆らい、それを抑え込むことはできません。歌いたいという欲求を感じ、そう出来ない時、私は不幸です。しかし求めるだけでは充分ではありません。自分の能力を伸ばすことは時には困難でつらい作業です。でも、自分が伝えたいと思うことに人が耳を傾け、時にはほほ笑み、休息し、気分を変え、内省的になっていると感じることが出来る時、それは奇跡的な瞬間となります。



“Kołysanka Rosemary”（ローズマリーの子守唄）をしっとりと歌うヨアンナ。聴衆はひたすらきき惚れた。2011.6.18「午後のポエジア」にて

もうひとつのポーランド史

ベラルーシの歴史と伝説

～バルバラ・ラジヴィルの亡霊～

越野　剛

日本人にはあまり馴染みのないベラルーシという東欧の小さな国に私は住んでいたことがある。ポーランドとロシアの狭間といえばどの辺りにある国か分かって頂けるだろうか。そこで専門調査員という日本大使館のお雇い仕事を2年ほど勤めた。ベラルーシとの外交関係は浅く、あまり日本からのお客さんも来ることはないので、のんびりした日々をすごしていたものだ。あるとき日本のテレビ局から連絡があって何かと思ったら、ベラルーシには美人が多いといわれるが学問的根拠はあるかという質問だったりした。のんきな話である。春になるとよく電話をかけてくるベラルーシ人もいて、世紀の大発明をしたから日本のテクノロジーでぜひ実用化してほしいという。まったくのんきな話である。

こんなことを書くと国民の税金から給料をもらっていながら何をやっているのかと怒られそうだが、もちろん日々の仕事はきちんとこなしていたつもりである。ただしモスクワとかワルシャワの日本大使館のように神経をすり減らすような忙しさはなかった。そんな私のひそかな楽しみのひとつは、日曜日の朝にベッドの中でぼんやりしながら教会の鐘の音を聴くことだった。よく聴くと鐘の響きには二種類ある。澄んだような余韻を残しながら単調に響くのがカトリック教会、大小の鐘を複雑な音色で鳴り響かせるのがロシア正教会である。自分がまさしくポーランドとロシアの狭間の空間にいるのだなということを実感する、夢うつつのひと時である。

ベラルーシ・リトアニア・ウクライナの三民族は、ロシアとポーランドの二国がその領土をめぐって取ったり取られたりを繰り返してきた歴史を持っている。ポーランドというと大国に運命を翻弄され続けた受難の民族というイメージがあるが、近代以前は東欧随一の強国だったこともあるのだ。ポーランドとロシアという二つの異文化がベラルーシに残した影響はいろいろなところに見ることができる。例えばカトリック教徒のクリスマスは 12 月 25 日だが、ロシア正教徒にとっては1月7日である。カトリックと正教会が共存するベラルーシでは自然とクリスマスを二回も祝うことになる。

ベラルーシの文化はソ連時代にロシアから強く影響を受けたが、独立してからはロシアと違う独自性があるということが強く言われるようになった。しかしそういうベラルーシ的とされる物も、よく調べてみると今度はポーランドが起源だということも多い。例えばベラルーシでは民族文化復興を願う人たちの間で、「バトレイカ」というクリスマスに演じられる人形劇がちょっとしたブームになっている。これは二階建ての家を模した移動式の箱舞台の中で、聖書のキリスト降誕の場面を演じるものだ。上の階は天界を表しており、天使の人形が登場して「聖なる御子が世に生まれた」と厳かに告げたりする。下の階は人間の世界になっており、悪役のヘロデ王が生まれたばかりのキリストを探して殺そうと企む。

一階部分のシナリオには自由な演出が許されていて、私が見せてもらったバトレイカ劇では、ベラルーシのルカシェンコ大統領そっくりの顔をした人形がヘロデ王を演じていて、独裁的な大統領令を乱発して民衆を苦しめていた。ロシア語とベラルーシ語が混ざったような田舎っぽい喋り口までもがルカシェンコ大統領にそっくりで、最後の場面でヘロデ王が死神の鎌で首をちょん切られると、見ていた子供たちがいっせいに歓声を上げた。

ベラルーシ人がオリジナルな文化遺産として誇るバトレイカだが、これも実はポーランドの「ショプカ」が伝わってきたものだ（さらに元をたどると人形劇の盛んなチェコから来たものらしい）。バトレイカと同じように建物状の舞台でキリスト降誕の場面が演じられるもので、クラクフではヴァヴェル城や聖マリア教会を模したショプカがよく知られている。ポーランドのショプカは人形劇として演じられるというだけではなく、日本の雛壇のような飾り物としても重宝されている。

ベラルーシの古い歴史を見るとポーランドとのつながりはもっとはっきりと見えてくる。ポーランドの独立を守るために戦ったタデウシュ・コシチュシュコやポーランドの大詩人アダム・ミツキェヴィチは今日のベラルーシで生まれている。ベラルーシの歴史教科書ではコシチュシュコもミツキェヴィチも民族の偉人として紹介されているのだ。この連載ではポーランドがリトアニアやベラルーシとひとつながりの連合国家として栄えていた時代（15-18 世紀）を取り上げて様々なエピソードを紹介したい。ラジヴィル家という大貴族（マグナート）の一門が話の中心となる。

彼らはベラルーシとリトアニアに広大な領地を所有しており、もしもベラルーシが独立の王国になる機会があったならラジヴィル王朝ができただろうとさえ言われている。

ぞっとするような復讐譚、ロマンチックな恋物語、こっけいな笑い話など、ラジヴィル家には興味深い逸話や伝説がたくさんあるのでどうぞご期待ください。

バルバラ・ラジヴィルの亡霊

ここではリトアニアの名門貴族ラジヴィル家にまつわる様々な逸話を紹介したい。中世のリトアニア大公国は現在のベラルーシをあわせた大国であり、隣のポーランドと連合王国のかたちをとっていた。そのためラジヴィル家の歴史はベラルーシ・リトアニア・ポーランドの三つの地域にまたがるものとなっている。ベラルーシのちょうど真ん中あたりにニェスヴィシュという小さな町があるが、そこにはユネスコの世界遺産にも指定されている古い城館がある。今でこそニェスヴィシュはのどかなベラルーシの地方都市にすぎないが、かつてここはラジヴィル家の居域だったところだ。バロック風の域館の周りには英国式の庭園が広がっており、観光客はのんびりと散策を楽しむことができる。しかしこの場所には夜な夜な「黒い貴婦人」と呼ばれる幽霊がさまようという言い伝えがある。今回はそんなニェスヴィシュの幽霊にまつわるエピソードを紹介しよう。

16 世紀の中ごろ、ニェスヴィシュのラジヴィル家は「黒ひげ」のミコライと「赤ひげ」のミコライとあだ名された従兄弟たちの活躍によって、リトアニア大公国で最も有力な貴族となっていた。赤ひげのミコライにはバルバラという美しい妹がいて、たまたまポーランド王の息子ジグムントによって見初められた。バルバラはリトアニアの首都ヴィリニュスに住んでいたが、やがて彼女の屋敷には夜ごと王子が足しげく通うようになる。噂を聞いてニェスヴィシュからやってきた両ミコライは一計を案じてジグムントが忍んできたところを待伏せして、その場で王子がバルバラと結婚することを強要した。あらかじめ司祭や証人を用意するほどの周到さであった。ラジヴィル一門の娘の名誉が傷つくことを怖れたこともあるだろうが、ポーランド王家との縁戚関係を得る絶好の機会をとらえたと見ることもできる。すでにラジヴィル家の美女に魅了されていたジグムント王子は、結婚の事実を秘しておくことを条件にして両ミコライの要求を受け入れた。

やがて 1548 年に父王のジグムント1世が死去する。王子がジグムント2世として後を継ぐことになり、バルバラ・ラジヴィルとの結婚を隠しておくわけにはいかなくなった。議会（セイム）は王族でもないリトアニア貴族の娘を王妃として認めることをしぶった。ポーランドは、王様に対して貴族の力が強かったことで知られている。母のボナ・スフォルツァ王妃も息子の結婚に反対の意思表示をするため、実家のイタリアに里帰りしてしまった。プロテスタントを信奉していたラジヴィル家に対して、カトリックの立場からの敵意もあったようだ。

それでもジグムント2世はなんとか貴族たちを説得して、1550 年にはバルバラは新王妃として無事に公認された。ところが喜ぶ間もなく最愛の妻は病に倒れ、翌年にはあっけなく死んでしまう。彼女を憎んだ王母ボナの手先によって毒殺されたとも伝えられている。彼女の遺骸はポーランドの当時の首都クラクフではなく、リトアニアのヴィリニュスに移して葬られた。

「バルバラ・ラジヴィルの亡霊」W・ゲルソン画（1886）

この先は伝説にすぎないのだが、悲嘆に暮れる王は黒魔術によってバルバラの霊を呼び出すことを考えたという。そこで登場するのが有名な魔法使いパン・トヴァルドフスキである。悪魔に魂を渡す条件で魔術の知識を得たトヴァルドフスキはいわばファウスト博士のポーランド版である。悪魔の手を逃れて月に移り住んだ話は、絵本などで今の子供たちにもよく知られている。トヴァルドフスキは国王に頼まれて、バルバラ・ラジヴィルの故郷であるニェスヴィシュの城館で死者の霊を召還する儀礼を行った。ジグムント2世は美しい妻の面影が薄闇の中に浮かび上がるのを見ると、身動きしないよう警告されていたにもかかわらず我慢できずに立ち上がって亡霊を抱きしめようとした。そのときからバルバラは死者の国に帰ることができなくなり、ラジヴィル家の域舘と庭園を永遠にさまよい続けることになった。ニェスヴィシュで開かれる舞踏会の席にあまりにも派手な格好をした女性がいると、バルバラの亡霊が現れて警告したという。いつしか彼女は「黒い貴婦人」と呼ばれ、戦争や災厄を予兆するものとされるようになった。第二次世界大戦でベラルーシを占領したドイツ兵も、ニェスヴィシュで「黒い貴婦人」の幽霊を目撃したという。ジグムント2世とバルバラ・ラジヴィルの悲恋の物語は、ポーランド・リトアニア・ベラルーシのそれぞれでよく記憶されており、小説や戯曲や映画の題材にされている。

ポーランド国歌のお話

2010年10月の懇親会で、ポーランド国歌を教えていただきみんなで歌い、マズルカの舞曲を取り入れたその曲の美しさに感動しました。その後「国歌のことも書いた本を見つけたので」と会員の方から紹介されました。その本の一部をご紹介します。

「東ヨーロッパの歴史は、ひと口にいって、民族興亡の歴史だといえる。中でもポーランドは約 200年の長きにわたって、国家興亡の歴史を繰返している。その間、幾多の著名な詩人、作曲家が出ているが、それだけ優れた愛国歌、国民歌が数多く生み出されている。<…>ポーランドは民俗音楽の宝庫である。もちろん、音楽はスラブ系だが、といってロシアとはかなり異質なものである。なぜなら、カトリック教会の影響と共に、早くから西ヨーロッパ音楽の洗礼を受けていたからである。<…>マズルカもポロネーズと共に、この国が生んだ楽聖ショパンにより有名になった。<…>ショパンも、マズルカやポロネーズなど、祖国の民俗音楽を芸術化した名作をたくさん書いている。<…>この国の国歌も、やはりこのマズルカを取り入れた曲である。国歌になった歌曲は『ドンブロフスキのマズルカ』といわれ、歌詞は**ユゼフ・ヴィビツキ**（Józef Wybicki）によって作詞されたが、作曲者はいまだに明らかにされていない。作詞者ヴィビツキは、ポーランド国家の滅亡（1795年）前から愛国的文人および政治家として知られ、ポーランド滅亡後はフランスに亡命、同じく亡命中のドンブロフスキ将軍を援けて、祖国再興のためのポーランド人部隊の組織に尽力し、のちに帰国、最後はポーランド王国の大審院長官を勤めた人物だということである。この国歌は、1794 年の独立革命戦争から生まれたといわれているが、その由来をもう少し詳しく話してみよう。

時は西暦 1794 年春<…>その前年の露独両国による第 2 回ポーランド分割に悲憤やるかたのなかったポーランド国民は時の貴族政府と異国の侵略者たちに対して救国の大叛乱を起こした。総大将として采配を振るったのは、フランスの陸軍大学を卒業し、アメリカの独立戦争に参加して、同戦争史に輝かしい一ページを残し、帰国後もロシア軍との戦い（1792 年）に大活躍をした**タデウシュ・コシチュシュコ**であった。だが、ポーランド愛国者たちの最後の蜂起も、わずかに当初幾つかの個々の勝利をおさめただけで、半年あまりで弾圧され、コシチュシュコ自身は負傷の上ロシア軍に捕えられ、ペテルブルグの牢に入れられてしまった。それだけではない。この叛乱がかえってアダとなり、翌年露、独、墺3国によって第3回分割が行われ、ポーランド国家は遂にヨーロッパ地図の上から完全に抹殺されてしまった。事志と違ったポーランドの愛国者たちはあいついで外国に亡命した。**ヤン・ヘンリク・ドンブロフスキ**将軍（Jan Henryk Dąbrowski）も、その一人で、パリに亡命し、そこで再挙の機をうかがっていた。まもなく仏、墺の間に戦争が始まり、ナポレオンが仏軍総司令官としてイタリアに出陣することになった。ドンブロフスキは好機いたれりと、ナポレオンに対し、ポーランド人部隊を組織し、仏軍に協力してオーストリアを打ち破りたい旨を申し入れた。ナポレオンはかれの希望をいれた。ドンブロフスキは急ぎポーランドの愛国者たちにけっ起の檄を飛ばした。やがてドンブロフスキの下には、各地に亡命中のポーランド人ばかりでなく、露、独、墺 3 国の支配下にあった旧ポーランドからの参加者も、ぞくぞく集まってきた。この混じりっけのない純粋なポーランド人部隊は、破竹のいきおいのナポレオン軍の中でも、特に勇敢な部隊として名声があがり、ナポレオンはこの部隊を信頼して、しばしば最も危険な部署に差し向けたが、部隊はいつもナポレオンの期待にそむかぬ働きをしたといわれている。

異郷の野に、山に、ひたすら祖国の再興を念じながら、昼は硝煙弾雨の中をかけまわり夜はかがり火をたいて仮寝の夢をむさぼった亡国ポーランドの志士たち、その志士の一人であったヴィビツキが、日頃のたしなみで歌詞を作り、仲間の誰かがそれに曲をつけてドンブロフスキ部隊の全員が、みずからを慰め、お互いを鼓舞するため歌い合った歌、その歌が実は、今日でもなおポーランドの国歌として生きているのである。<…>正式国歌となったのは 1927 年である。」

（藤沢優著『国のシンボル』頌文社、1970 より）

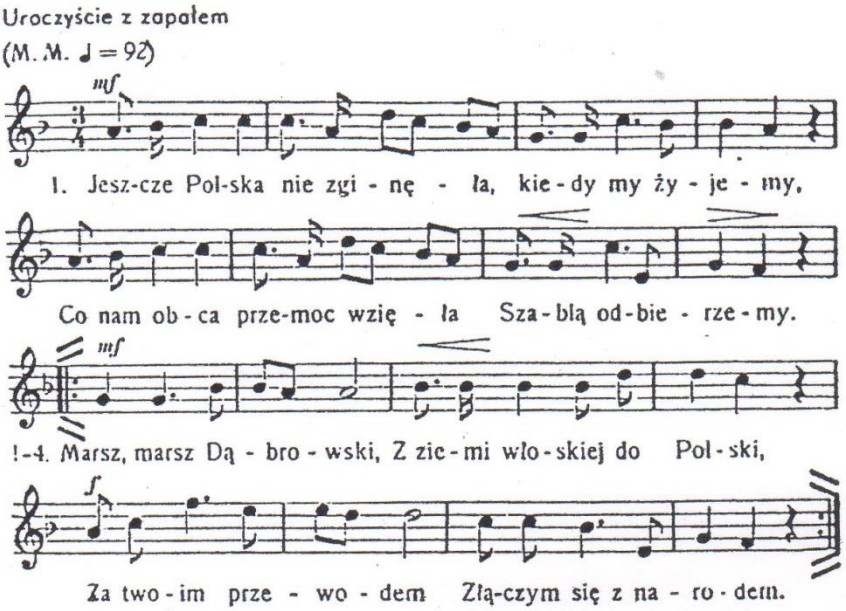
氏間多伊子

＊引用の人名はポーランド語の発音により改めました。

ポーランド国歌　**Jeszcze Polska nie zginęła**

Hymn Narodowy (1797)

Lyrics: Józef Wybicki　　Unknown composer



Jeszcze Polska nie zginęła,
Kiedy my żyjemy,
Co nam obca przemoc wzięła,
Szablą odbierzemy.

Marsz, marsz, Dąbrowski,
Z ziemi włoskiej do Polski!
Za twoim przewodem
Złączym się z narodem.

Przejdziem Wisłę, przejdziem Wartę,
Będziem Polakami,
Dał nam przykład Bonaparte,
Jak zwyciężać mamy.

Marsz, marsz, Dąbrowski...

ポルスカいまだ滅びず
われら生きるかぎり
外つ国の力に奪われしもの
われら剣もてとり戻さん

“進め、すすめ、ドンブロフスキ
イタリアの地よりポルスカへ
汝の指揮のもと
われら国の民と結ばれん”

ヴィスワを越え、ヴァルタを渡り
われらポルスカの民とならん
ボナパルトのためしにならい
われら勝利をば得ん

“進め、すすめ、ドンブロフスキ（リフレイン）”

（訳詞：坂東宏編『ポーランド入門』三省堂、1987 より）

「ポーランド軍団を率いるヤン・ヘンリク・ドンブロフスキ将軍」ユリウシュ・コッサク画（1882）

国　歌

ポーランドは未だ滅びず
作詞　ユゼフ・ヴィビツキ　／　作曲　不詳

〈ラジオ深夜便より〉

ワルシャワの地下鉄

岡崎 恒夫

今年は1989年の民主化からちょうど25年目に当たるので、この 25 年間でワルシャワにとって何が一番大事な出来事だったかという市民投票を行ったところ、ダントツで「地下鉄建設」が一位でした。

建設着工が 1983 年、95 年に全路線の半分ほどが開通して、全線開通は 2008 年ですから、着工から実に 25 年かかっています。ところが、その全線というのが1路線23キロだけ、端から端まで40分弱で行けるのですから驚きです。ロンドン地下鉄の 400 キロ、パリの 201 キロ、東京の 304 キロ、大阪の 129 キロと比べて、小人と巨人の違いです。札幌地下鉄の総路線の半分、東西線の長さとほぼ同じといえば、札幌の皆さんにはわかりやすいでしょう。

その地下鉄建設の計画は戦前からあり、計画されては消え、つぎもまたその繰り返しといった状態でした。こんなに時間がかかった主な原因は、まずポーランドが旧大陸にあるため、どこも砂地ばかりで地盤が極めて弱いことが挙げられます。戦前は地盤を強化するための技術が未発達で計画倒れになりました。着工した共産主義時代は、弱体化した共産主義を回復するための秘策として地下鉄工事を始めたものの、結局財政が持たなかったというのが真相のようです。

着工した当初わが息子は小学一年生でした。わが家から旧市街にある学校までバスで 40 分近くかかるので、地下鉄ができれば渋滞もなく速く学校に行けると期待していたのですが、出来上がったときに彼はすでに 31 歳の社会人になっていました。

全路線 23 キロの間に駅が 21 あります。地下鉄全体の職員は 1,700 人で、そのうち 140 人ほどが運転手だそうです。毎日 50 万人の乗客を運び、市民の足として大活躍です。

工事が始まった頃、地上の道路は、自動車数が少ないこともあって、渋滞など特別な日にしかありませんでした。25 年かけて建設しているうちに社会主義から自由経済主義に変わり、それに伴ってモータリゼーションが急速に進みました。初めの頃、道路はこんなにガラガラなのに、なぜあちこち道路を閉め、掘り返して地下鉄などを作るのかといぶかっていたのですが、今や地下鉄なら10分で行けるところを自動車だと小1時間かかることを思えば、こういうのを「先見の明」というのだと納得しています。

おかざき つねお
1944 年中国・瀋陽（奉天）生まれ、下関で育つ。1970 年よりワルシャワ在住、ワルシャワ大学日本学科講師、東洋学部副学部長を歴任、現在は同特任講師、NHK ラジオ深夜便「ワールドネットワーク」ポーランド・リポーター。

現在ワルシャワでは新たに東西線を建設中です。工事が始まってすでに3年以上経っていますが、川底の下を通らせるという難工事があったりして、開通は延び延びになっていて、これから何年かかるか見通しが立ちません。「来年までにプウ・メトラできる」という、市民の間で流行った笑い話があります。このプウ・メトラの意味は、「地下鉄の半分」という意味と「半メートル」（50 センチ）の意味があります。

では、ワルシャワの地下鉄の長所を市民の声から拾ってみましょう。

その一：スピード。年ごとに長くなる地上の渋滞をよそ目に、地下鉄は確かに早くその上時間通りに運行されるので市民の信頼を勝ち取っています。また地下鉄の駅周辺には駐車場が設けられていて、市外から自動車で来た人が最寄の駅に駐車して地下鉄に乗り換えることが流行っています。ラッシュ時には3分間隔ぐらいで運行されています（これは日本と同じでしょうか）。

その二：車輌も駅も清潔なこと。ニューヨークの地下鉄のような落書きは一つもありません。地下鉄といえば埃っぽかったり、特別なにおいが漂ったりしますが、開業 20 年になろうというのに、ここの地下鉄は全くそんな気配はありません。最新アンケートによれば、車輌内の清潔度は 83%、駅は 91%が満足しています。私もヨーロッパの多くの国で地下鉄を利用しましたが、確かにワルシャワの地下鉄はき

れいです。最近 CNN が選んだ全ヨーロッパで最も美しい 12 の駅の中に入っています。

その三：高齢者、身障者、子供連れの母親、車椅子利用者のためのエレベーターは各駅に複数備わっていて、大変評判が高いです。乳母車や自転車の持ち込み、さらに動物（犬、猫）を連れて乗ることも可です。

各駅のホームのデザインがそれぞれ違うので、駅名を知らなくてもどの駅にいるかわかるように工夫されています。これもたった1路線 21 駅しかないワルシャワ地下鉄の特徴かもしれません。

ただ、いいことばかりではなく、朝晩ラッシュ時の込みようはかつての日本を思いだします。車内の広告も多すぎてあまり評判がよくありません。しかしこんなことも吹き飛んでしまうくらいワルシャワ市民は地下鉄が好きで、もうこれ抜きでの移動は考えられないという人がたくさんいます。

「ラジオ深夜便」と岡崎恒夫先生

ポーランドの言葉も文化を知らないまま、主人について曇り空のもと落ち葉の舞い散るワルシャワの街に足を踏み入れたのは、1976 年の秋でした。当時のポーランドは社会主義国家であったため、自由な日本からまいりました私は種々の習慣の違いに驚くことの多い毎日でした。そのようなときワルシャワ大学の岡崎恒夫先生と知り合い、ワルシャワで生活するにあたっての必要な情報をいろいろ教えていただいたおかげで、一年間のワルシャワ生活を無事に楽しく送ることができました。

あるときふと NHK の深夜の FM 放送を聞いていましたら、ワルシャワの岡崎先生の歯切れの良い、懐かしい声が聞こえました。海外リポーターとしてワールドネットワークを担当されていることを知りました。それ以来、この放送を必ず聞いています。放送予定は月刊誌『ラジオ深夜便』で分かります。

栗原朋友子

〈ポーランドだより〉

変わりゆくポーランドの タデウシュ・カントル

津田 晃岐

私はこの5年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいるが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学で教えながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告する。

1．札 幌

この夏、久しぶりに札幌を訪れた。何年ぶりになるのか、すぐには思い出せない。10 年、いや、もっとになる。それほど遠い昔の話だ。が、不思議なことに、この年月の間に町が変わってしまったようには思えなかった。

変わったのは、むしろ私の方だった。まるで北海道大学での学生時代を再体験していくような、何とも不思議な感覚に襲われながら、同時にあの頃とはすっかり変わった自分をも実感する旅となった。

当時の様々なエピソードが思い出されていくなか、タデウシュ・カントルについての記憶も私の中でポツリポツリと口を開き始めた。タデウシュ・カントルは、ポーランドのクラクフ市を中心に活動した画家、造形作家、そして演出家だ。自作の舞台の上に、俳優としてではなく、カントル本人として常に登場していたことから、前衛的あるいは実験的な演劇の演出家と見

結婚５周年記念の旅行は北海道めぐり、
小樽運河の前で、筆者（右）と妻モニカ

なされている。

そのカントルと私は札幌で出会った。とはいえ、それは本を通しての出会いであり、それ以外の可能性は初めからなかった出会いだった。というのも、私がカントルを知ったのは、彼の死を追悼する雑誌の特集号によってだったからだ。

今でもはっきりと覚えている――タデウシュ・カントルという名のポーランド人の演劇家を初めて知った日、そして彼の演劇論と実践から受けた衝撃と親近感、さらにはより彼を理解したいがためだけに夢中になってポーランド語を学んだ日々。

実は、カントルについては、以前、『POLE』第 73 号で彼の講義の一部を引用したことがある。「変わりゆくポーランドの消費文化」をテーマとした記事の中で、「全能の消費」というカントルの反現代文明的な概念を紹介した。演劇の分野で前衛的な活動を続けたカントルだが、彼の創作の根本には常に「個人」への眼差しがあった。大量生産・大量消費を宿命とする現代文明の中で、その恩恵を享受しながらも、画一化され、個性を失いつつある哀れな「個人」に、もちろんカントルは目を向けた。だが、それだけでなく、暴力によって生命を奪われた個人、物のように扱われる個人、虐げられる個人、不当に低く見なされる個人、記憶の彼方に忘れ去られた個人、無視される個人に対しても、カントルは眼差しを注ぎ続けた。彼の演劇論の特徴として知られる「死の演劇」や「最下等のリアリティ」といった概念も、最終的には彼の「個人」への眼差しと結びついた観がある。

> 自分の芸術で世界を救いたいとは思わない。
> “普遍”なんか信じない。
> 我々の世紀のそれなりの経験の後では、それが今日どんな形で終わっているか、この悪名高い“普遍”が、何の、誰の役に立っているか、知っている。
> 今日では地球の大きさにまで広がってしまった分だけ、ますます危険になった“普遍”が。
> 私は〈自分を救いたい〉のだ。
> 我が身可愛さからではなく、どういうわけか〈個人的な価値〉しか信じられなくて！
> 〈私は自分の狭い想像力の部屋に閉じこもる〉

こうしてカントルは終生演劇にこだわり、舞台に立ちながら自らを「個人」のサンプルとして晒し続けた。カントルにとって、演劇とは「個人」の想像力が仮初めの姿をまとって現れる時空間であり、そうした「個人」の「想像力の部屋」こそが舞台だったからだ。

カントルと付き合いはじめて、もう 20 年以上になる。この間、私はいくつもの研究や論文を経て、一定の距離をカントルに対して持つようになった。心酔や信奉ではなく、冷静な理解と静かな共感とをもってカントルを見つめるようになった。それは、カントルが変わったのではなく、私の方が少しずつ変わってきたからだ。もちろん、カントルと私の関わり自体は、私が変わったからといって終わるわけではないし、実際、研究や論文を通して今も続いている。そして、カントルを切っ掛けに始まった、私とポーランドの関わりも、不思議な縁ながら、現在も続いている。

2. 寺山修司

カントルと日本をめぐる面白いエピソードとしては、カントルと寺山修司の友情を挙げることができる。この二人の奇才の交流は、何も演劇のレベルだけに留まらなかった。

つい最近、国際寺山修司学会刊行の『寺山修司研究』第6号に寺山とカントルの交友について執筆する機会を得た。その一部を引用させてもらう。

＊　＊　＊

寺山修司（1935-83）=写真右下=とタデウシュ・カントル（1915-90）=写真左下=の両方の名を知る者は、同時に、この二人が生前深い親交を結んでいたことも知っている。二人の出会いについては、本人たちだけでなく、幾人かの証人もエピソードを紹介してくれている。

> カントルは、人を寄せ付けない威厳をもち、つねに何かに怒っているような気難しい人だった。ところが、二十歳も年下の寺山とは気が合って、まるで仲のいい父子のように親しくしていた。パリで行われた演出家のシンポジウムで意気投合して以来、各国の演劇祭で出会うたびに親交を深めていたのである。[1]

二人が初めて出会ったのは、1974 年に「パリで行われた演出家のシンポジウム」のようである。それはジャン=ルイ・バローの劇場レカミエ座で開かれたもので、世界各国から演出家、劇作家、演劇評論家らが集まった。このシンポジウムについては、寺山も『迷路と死海』（1976）の中で書

いており、当然カントルの名前も登場する。また、寺山だけでなくカントルも、後年（1990）公演のために来日した際、当のシンポジウムでの寺山の印象をインタビューの中で語っている。

> 寺山修司には血縁性を感じたね。これは私がほかの芸術家にはほとんど感じないものだ。彼も私と同様、舞台で機械を好んで使ったし。彼はとても知的でユーモアのセンスがあった。パリのジャン=ルイ・バローの劇場で開かれたシンポジウムに出席した時、彼は私の隣に座っていた。幸福や人類の未来についてハイレベルな議論があり、私はいい加減うんざりしていて、異議を唱えたかった。その時寺山が手を上げて、短い話をした。「ふたりの日本人が川岸を散歩していた。ひとりが川に落ちて、溺れ死んだ。その教訓は、散歩するために川岸に行ってはいけない。」大まじめで退屈な雰囲気の中で、寺山はあえてそんな話をしたんだ（笑）。バローは「話はそれだけですか？」と尋ね、寺山は「これだけです」と言った（笑）。それを聞いて私は彼に深い共感を覚えた。短いありふれた話だが、ここには人間の運命をめぐる哲学がある。[2]

その後も二人は、世界各地で開催された演劇祭やシンポジウムでたびたび顔を合わせ、親交を深めていった。そして、二人の友情は、寺山がこの世を去るまで続いた。死の前年（1982）の世界演劇祭「利賀フェスティバル」のために来日したカントルに会おうと、寺山は病を押して参加し、演劇祭後のカントルの東京公演のためにも骨を折った。公演当日には、劇場のロビーにさえ姿を見せ、「落着かない表情で客の入りを気にしていた。彼はわが国の演劇人のなかでもっとも最初にカントルを認め、彼に同志的な共感を抱いていた。」[3]

そういえば私が寺山修司を知ったのも札幌だった。ちょうど北海道大学にいた時分、死後 10 周年を迎え寺山の作品が軒並み復刊され、ちょっとしたブームになっていた。既に演劇に関心を持ち、カントルと出会っていた私は、これを機に寺山についても興味を持ち、研究するようになったのだった。

3.「インスピレーション」

寺山修司と同じく、カントルもまた、自国よりも先ず外国で高く評価された演劇家だ。そして、今年（2013）死後 30 周年を迎える寺山が、この機に顧みられ、ますます評価を高めているように、死後 20 年を経たカントルも、ようやく自国ポーランドで正当に評価されつつあるようだ。半世紀に及ぶカントルの創作全期を網羅した3巻本の論文集（2004）を切っ掛けに、カントルの演劇論あるいは芸術論を、現代演劇や現代美術の流れの中でもう一度捉え直そうという動きが起こっている。カントルは、今やただの「異端児」ではなく、現代芸術史の最も重要な人物の一人となりつつある。演劇だけでなく造形美術や絵画の分野でも活躍したカントルの場合、演劇と俳優術に特化していたグロトフスキとは違い、より広い文脈での再評価が行なわれているようだ。現にアダム・ミツキェヴィチ大学のポーランド学科の「ポーランド文学史」の授業でも、現代ポーランド文学に影響を与えた思想の一つとしてカントルの演劇論あるいは芸術論が紹介され、一時間の講義をまるまるカントルに捧げただけでなく、他の機会にもカントルの言葉をたびたび参照していた。

もともと国外では早くから評価されていたカントルだが、近年はポーランド国内でも、カントルに捧げた、あるいはカントルに触発された様々な学会やイヴェントが各地で開かれている。例えば、2010 年には、ポズナン市でカントルの美術作品の展覧会が、またヴロツワフ市で芝居『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』の映像上映会と学会が、そしてカントルの本拠地であったクラクフ市では死後 20 周年を記念した学会「今日こそタデウシュ・カントル！」が開催された。また、2011 年には、ジェシュフ市でカントル作品の展覧会や上映会などから成る複合的イヴェントが行なわれた。そして、2013-14 年にかけても、展覧会やパフォーマンス上演や出版から成る複合イヴェントが、クラクフ市を中心にして企画されており、その名も「誰がインスピレーションを？タデウシュ・カントル！」というものである。

注釈：

[1] 九條今日子『回想・寺山修司　百年たったら帰っておいで』デーリー東北新聞社、2005、203 頁。

[2] 扇田昭彦「人形、オブジェ、梱包、絵画……。美術家としてのカントール」、『Brutus』1990 年6月1日号（11-10）、94 頁。

[3] 四方田犬彦『オデュッセウスの帰還』自由国民社、1996、36 頁。

〈北海道のポーランド人から〉

誓います/ Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～

アグニェシュカ・ポヒワ

9月 15 日に結婚1年記念日を迎えました。結婚式の準備とその当日の思い出がまだフレッシュである一方、一年という間をおくと少し客観的に考えることができるようになった気もします。それがきっかけで、今回日本とポーランドにおける結婚式をさまざまな面から比べてみようと思いました。

長年日本に住んでいる私ですが、日本人の相手と結婚することになったので、やはり結婚式をあげるとしたら日本であげるのではと、予想していました。結婚式は、日本とポーランドという二つの違う世界がぶつかるテンションの高いイベントですから、どのように私たち二人の個性と私たちが代表する国の個性を上手に表せるのかが最大の問題とチャレンジとなりました。

そもそも日本とポーランドでは結婚はどのようにできるのか？結婚の準備はどこがポイントなのか？結婚式の当日の流れはどう違うのか？また両国の伝統的な結婚式は現在どう変わっているのか？という質問に答えてみたいと思います。

日本とポーランドにおける婚姻の違い

まずは、両国の法律から見た、婚姻が成立する場合を簡単にまとめましょう。

日本では役所で事前に記入した婚姻届を提出することで法律上、夫婦が認められます。好きな時に記入し、一人でも好きな時に提出できるという非常に便利で簡単な（外国人の場合を除いて）手続きですが、その一方、重要度の割には、ただ紙を渡して済むという、思い出にもならない、感情のこもっていない手続きでもあるという意見を外国人からよく聞くことがあります。

ではポーランドの場合はどうでしょうか？

日本より手続きが複雑ですが、次のようにお祝いすることになります。書類を渡すだけでは結婚はできず、シヴィル・ウェディングという式が必要となります。これは簡単に言うと、宗教的な要素を抜いた結婚式です。普通は市役所に付属する登記所の結婚会場で行われます。家族と友達が集まり、新郎新婦が役員の前で誓いの言葉を交わし、証人と一緒に書類にサインをし、最後に役員が結婚を認めます。

以前は役所で小規模なシヴィル・ウェディングを済ませ、教会で立派なウェディングを行うというパターンが一般だったのですが、1998 年から法律の改正によりコンコルダート・ウェディングという混合結婚式が可能になりました。教会の挙式が始まる直前に、役所からもらった書類に新郎新婦、その証人と神父がサインします。法律上も宗教上も結婚が認められ、さらに一回で済ませられるので、今はコンコルダート・ウェディングが広く行われています。

また、最近では無宗教、経済上の理由などでシヴィル・ウェディングのみを選ぶカップルが増えてきています。

Agnieszka Pochyła
1983 年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドルイ（Jastrzębie-Zdrój）生まれ。ポズナニ大学新言語学部卒（日本学修士）。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学し、現在フリーカメラマンとして活動中。